

祝 富山県出身 高山羽根子（たかやま・はねこ）さん

『首里の馬』（新潮社）で

第163回芥川龍之介賞受賞！

■経歴

1975年富山県生まれ。多摩美術大学美術学部絵画学科卒業。2009年「うどん キツネつきの」で第1回創元SF短編賞佳作に選出される。同年、同作を収録したアンソロジー『原色の想像力』（創元SF文庫）でデビュー。2015年短編「おやすみラジオ」が第46回星雲賞日本短編部門候補作に選出される。短編集『うどん キツネつきの』が第36回日本SF大賞最終候補作に選出される。2016年「太陽の側の島」で第2回林芙美子文学賞大賞を受賞。2019年「居た場所」で第160回芥川龍之介賞候補、「カム・ギャザー・ラウンド・ピープル」で第161回芥川龍之介賞候補。2020年「首里の馬」で第163回芥川龍之介賞受賞、第33回三島由紀夫賞候補。同年『首里の馬』（新潮社）刊行。

■主な作品

『うどん キツネつきの』東京創元社、2014年

パチンコ店の屋上で拾った奇妙な犬を飼育する三人姉妹の人生を繊細かつユーモラスに描いた表題作ほか5編を収録。第36回日本SF大賞候補作。第46回星雲賞日本短編部門候補作「おやすみラジオ」を収録。

『オブジェクトム』朝日新聞出版、2018年

小学生の頃、祖父はいつも秘密基地で壁新聞を作っていた。壁新聞、移動遊園地、印刷工場・・・記憶の断片をたどると、いくつかの謎が浮かんでは消える。第2回林芙美子文学賞大賞受賞作「太陽の側の島」を収録。

『居た場所』河出書房新社、2019年

かつて実習留学生としてやってきた私の妻、小翠（シャオツイ）。表示されない海沿いの街の地図を片手に私と彼女の旅は始まる。第160回芥川龍之介賞候補。

『カム・ギャザー・ラウンド・ピープル』集英社、2019年

大人になった「私」は雨宿りのために立ち寄ったお店で「イズミ」と出会う。イズミは東京の記録を撮りため、SNSにアップしていた。その映像には、デモの先頭に立つ高校時代の友人ニシダがいた。第161回芥川龍之介賞候補。

『如何様』朝日新聞出版、2019年

ある美術編集者から、復員した画家は平泉貫一本人なのか調べてほしいという依頼を受けた。貫一は名の知られた水彩画家であったが、出征前とは似ても似つかぬ姿で復員し、まもなく失踪したのだった。わたしは彼の妻、妾、画廊主、軍の部隊長と何人もの聴き取りを行い、やがてたどりついたのは、彼が抜群の贗作技術を生かして軍の仕事をしていたという事実であった。

『首里の馬』新潮社、2020年

首里の港川にある「沖縄及島嶼^{とうしょ}資料館」で資料の整理を行っている未名子。資料館は無給のため彼女は一風変わった仕事をしてきた。ある朝、彼女の家の庭に沖縄の天然記念物である宮古馬がうずくまっていた。彼女はその馬に「ヒコーキ」という実在した琉球競馬の名馬の名前をつける。事実から書きすすめながらSFの世界に飛翔し、奇妙な、しかし胸に迫る作品を紡ぐ高山の非凡な才能が開花した感動作。第163回芥川龍之介賞受賞作。

*作品解説は出版社の作品紹介を参考にしました。

■高山羽根子さんと富山

高山さんは、母親の実家がある富山市の病院で生まれ、関東で育ちました。

祖父母が元気であった頃はお盆や正月、夏休みを富山で過ごし、映画館や書店、美術館に足を運び、県立近代美術館（現・県美術館）で富山出身の詩人・美術評論家の瀧口修造のコレクションに刺激を受けたことが多摩美術大学に進学するきっかけとなりました。

令和2年2月16日（日）に高志の国文学館で開かれた文学講座に講師として招かれた高山さんは、富山の風景と創作とのかかわりについて次のように述べています。

美術を長く学んでいて、小説を描きはじめてのは三十を超えてからです。ずっと富山で育ってきたわけではありませんが、祖父母や母の思い出やできごとが、どこかで自分の創作の根っこに関わっているのだという思いがあります。富山には多くの博物館、美術館があり、祭りがあや山や海があり、物語の印象であふれていました。これは文章、絵画に関わらず、表現にとって大きな財産です。

高山さんの創作の根底に、生まれ故郷である富山での思い出があるとされ、富山の豊かな自然や文化があらゆる表現にとっての大きな財産になると語られました。

■芥川賞選考委員・吉田修一さんの講評

「3回目の候補で、『孤独な場所とはどういう場所か』を描こうとしているのが見えてきた」

（2020年7月16日付、北日本新聞朝刊より）

■芥川賞受賞会見での本人コメント（概要）

《受賞した時の気持ちは》

平たく言うとほっとした。もう少し書いて大丈夫と思えた。

《富山への思いについて》

富山の話を書きたい気持ちはすごくあって、ただ、行かないと書けない。行って、その場に立って書かないといけないものがたくさんある。今は現地取材が難しい。

富山は田舎の親戚の家に小さい頃に行き来していた。田舎という点では、私が住んでいたのが神奈川県の方だったので、田舎とは言えないくらい富山のど真ん中に祖父母の家があった。お城のすぐそばで、田舎に帰るといよりビルがいっぱいあるところに行くという感じだった。

今年の2月、高志の国文学館で講演があって富山に寄らせていただいた。やっぱり、景色がすごく変わっているところと、全く変わらないところがあって、自分の記憶にある場所と座標は同じはずなのに見える景色が違う、脳の中のバグみたいな、白昼夢みたいな経験があって、そういったものも含めて今後は書きたいなと思っていた矢先のことなので、取材できないのは残念。富山で待っていてくださった方々に申し訳ない気持ち。また富山にお伺いして、お話を聞かせていただきたいと思っている。